

磐姫皇后

鴻 巢 隼 雄

一、交替する時潮（仁徳—雄略）

古代日本の文学が本当に開花した時代は、推古、特に舒明の頃である。その最も著しい徴証は、万葉にあらわれた古代抒情詩の生成であり、その標型は、舒明の作品と目される、国見の長歌などにあると思う。だが必ずしも舒明朝にその系譜の出発があるとは限らない。かりに万葉の諸作品を作風の上から分類してみても、舒明以後が凡そ四期位には分れるのみならず、少くとも舒明（六二九年即位）以前に最初の胎動期として、雄略（四七八年即位）以後推古までの約一五〇年をあてるのが常である。尤もこの期に属する旨を集中で明記しているものは、作品、作家共に他の期よりはるかに少い。

（註一）歌数の多いのは磐姫皇后、雄略天皇で、治世代によつてまとめると、仁徳、允恭、雄略が際立ち、古代史上で治世活動が特に顕著な歴代を万葉以外の内外史籍から摘出してみても、信ずべき史料の多いという点で、ほぼこれに符合する歴朝名が登場するという事実があるのは興味深い。

中でも重要なことは、宋書夷蛮伝に見える五世紀以降の倭

王讃、珍、濟、興、武という五王に関する記事で、その内容から推すと、日本の仁徳、反正、允恭、安康、雄略に該当するように思われる。この時代は所謂男子の王による世襲制がとられはじめており、同時に倭の六つの上と呼ばれる直轄領と屯田の経営がすすみ、屯倉の著しい伸長に支えられて、日本の軍集団が四世紀末から五世紀はじめにかけて半島に上陸、北上したことを思わせる。（五王の最初に立つた讃（仁徳）が東晋に朝貢した記事もその夷蛮伝に見え、（四一三年）、又五王の最後に出た武王（雄略）が宋の順帝に上表文を出した史実も宋書夷蛮伝に見え（四七八年）、当時の倭王は将卒をひきいて民衆と共に戦野に出陣し、征服戦のために東奔西走するという、生々しい生産的な生活にたずさわっていたと考えられる。しかも五世紀の初頭には恐らく大和政権の版図も東日本にまでは拡大していかなかったと思われる節がある。当時は、六世紀初め（継体、欽明）と考えられる「国土生成神話の定着」時にはるかに先立っているのみならず、実は後の定着時にさへ、版図はまだ西日本だけに限られていたらし

い趣さへ見える。

右のように、倭の五王の時代は、武王(雄略)の頃でも列島統一政権の完全な成熟を見ていない実状でありながら、ともかく全体として外国文献にその活動があらわれた著しい時代であり、同時に古事記を見ても、その物語風の記事内容の下限が雄略記にあるという、すこぶるきわ立つた一致点を考慮に入れると、仁徳から雄略の治世が明らかに幅広い、しかも重大な過渡の一区切りとして浮び上る。そして万葉集中で最古の作と推定される仁徳皇妃の時代から、雄略朝に至るまでの厚い時代層の中に、伝誦的世界の最後の帰着点と、文字による開明的世界の発端という、いわば二つの反撥しあう時潮の、記念すべき交替期がある。

歌の世界についてもほぼ同じことがいえる。古代歌謡を収載している記紀を見ても、歌謡数は記紀共に仁徳の治世で急に展開しはじめのみにならず、酒宴、葬送、戦闘、労働、狩猟の如き、古代歌謡成立の諸契機による内容のものはこの天皇の治世には無く、むしろ仁徳帝と黒日売、八田若郎女などの詠みかわした相聞歌的な作品群に顕著な特色がある。即ち後に支配的になる、記事的内容に先立つて、一併の純粹な物語風の恋愛譚がこの治世を中心に集中している事實は、仁徳朝が文学的にも新旧交替を啓開する担当者としての位置に立つていたことを示している。

二、磐姫皇后

磐姫は、古事記によれば、大雀命として難波高津宮に坐し、まして天下を治め給うた仁徳天皇の皇妃で、葛城曾都毘古の娘、天皇との間に大江伊弉本和氣命(履中)、墨江中津王、瓊水齒別命(反正)、男浅津間若子宿禰命(允恭)の四児を設け、磐姫のために御名代として葛城部が定められた程である。施政面では、秦人を使役して茨田堤、丸邇池、依網池、難波堀江、小橋江を掘り、墨江津を定め、民の課役をねぎらつた帝ではあつたが、古事記によれば、石之日売命の嫉妬にこまりはて、帝の側近に侍する女人たちも、妃の一言立てば足もあがかにねたみ」給う、はげしい言動に戦き恐れ、「宮の中を得のぞかず」たゞひそみ住むという実状であつた。たとえば吉備の海部直の女で、黒日売という容姿端正な人との交渉は妃の嫉妬にさえぎられたために、黒日売を一旦吉備に歸し、帝自らも妃を欺いて吉備まで後を追ひ、数首の短歌をとりかわしている。又帝は、妃の不在中、八田若郎女と婚したので、妃は天皇の豊楽の料に木の国まで採集に出かけて得た御綱柏を、怒つて悉く海に投げ棄て、更にその時、和解のために天皇の使者に立つた口子臣を無慈悲にも雨中に立たせ、口子臣の「紅紐著けたる青摺の衣」も「皆紅色に変わる」ほどの仕打ちであつた。そして帝と妃との間に所謂「志都歌の返歌」と呼ばれる六箇の作が交換されている。

このように、仁徳帝の行動を敘した古事記は、今までに見ることのできなかつたような、純粹な恋愛歌をこの他にも速総別王、女鳥王との三角関係について歌うなど、いくつも美しい歌を点綴しているが、帝と愛の葛藤を演ずる主役は、何といつても磐姫皇后である。古代には珍らしい程の恋愛譚の集中が、この王妃の嫉妬をテーマにして物語られ、男女相聞の贈答歌の美しい綾が織り出されている。万葉集に収載されている作品の中で最古の時期に磐姫皇后のものを据えているのも、以上のように伝誦の世界の中に生きて来た、仁徳朝という、全く特異な時代の性格と切りはなして考えることはできないものと思われる。

三、作 品 群

万葉に見える磐姫皇后の作には卷二に併結している五首（八五、八六、八七、八八、八九）があり、その他に閑研のあるものとして、その中の一首（八五）の異伝と伝えられる衣通王（一名軽太郎女）（九〇）及び「難波天皇妹」「山跡皇兄」（四八四）をあげることができる。しかし「難波天皇」という言葉からすれば、難波に都した応神とも孝徳とも考えることができるので、強いて「仁徳」と限るのは誤解を生む。ただ代匠記初稿本の説に従えば（註二）、この「妹」は磐姫ではない。そこでその他の六首（その中、二首の類歌、即ち85-90、87-89を含む。）を次にかかげて、歌の性質を考えて

みよう。

磐姫皇后思天皇御作歌四首

(一) 君がゆきけ長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ（八五）

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

(二) かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを（八六）

(三) ありつつも君をば待たむ打塵く吾黒髪に霜の置くまでに（八七）

(四) 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへの方に吾が恋やまむ（八八）
或本歌曰

(五) 居明かして君をば待たむぬば玉の吾が黒髪に霜は降るとも（八九）
右一首古歌集中出

古事記曰軽太子姦軽太郎女ニ故其太子流於伊予湯也此時衣通王不堪恋慕而追往時歌曰

(六) 君が行きけ長くなりぬ山多豆の迎へをゆかむ待つには待たじ 此云山多豆者は今造木者也（九〇）

右一首歌古事記与類聚歌林二所説不同歌主亦異焉。因檢日本紀曰。難波高津宮御宇大鷦鷯天皇廿二年春正月。天皇語皇后。納八田皇女將為妃時皇后不聽。爰天皇歌以乞於皇后云々。三十年秋

九月乙卯朔乙丑。皇后遊_二行紀伊國_一到_二熊野岬_一。取_二其処之御綱葉_一而還。於是天皇伺_二皇后不_一在而聚_二八田皇女_一納_二於宮中_一。時皇后到_二難波濟_一。聞_二天皇合_二八田皇女_一大恨之云々。亦曰。遠飛鳥宮御宇雄朝種子宿禰天皇二十三年春三月甲午朔庚子。木梨輕皇子為_二太子_一。容姿佳麗。見者自感。同母妹輕太皇皇女亦艷妙也云云。遂竊通。乃愜懷少息。廿四年夏六月。御羹汁擬以作_レ水。天皇異之卜_二其所由_一。卜者曰。有_二内乱_一。蓋親親相姦乎云云。仍移_二太皇皇女於伊与_一者。今案_二二代二時不_レ見_二此歌_一也。

〔八五〕の歌は明らかに〔九〇〕の類歌に属する。〔九〇〕は允恭記によれば、天皇崩御後に、皇太子木梨輕太子がその同母妹輕太郎女にたわけて罪せられ、伊予に流される時、衣通王が答えた歌としてとりあげられているのを、そのまま題詞と共に収録したものである。書紀に右の歌は全く見えない。又その左註は仁徳、允恭兩紀を古事記と比較検討し、作られた場面を考定しようとしている。このように記紀に描かれた仁徳、允恭兩朝頃の恋愛譚の物語はいずれも美しいには相違ないが、左註の記事内容は〔八五〕の作者である磐姫皇后とは直接何の関聯もない。だが古事記がいくつかの古歌謠群を点綴させながら、ともかく古代には珍らしいほど美しく組み立てた、允恭記の輕太子と衣通王との親々相婚の悲哀譚の中

から、万葉の編者が〔九〇〕をとくに切りとつて、卷二の連作とも見られる磐姫の作の後尾に据えたことは、この歌を万葉編纂の行われた時期に、すでに〔八五〕の異伝の類歌と解して、類聚歌林の作と共にここにならべたものと思われる。

〔八五〕と〔九〇〕の両首は全く類同歌である。しかし、〔九〇〕は第三句が「山たづの」となつていて、〔八五〕の「山尋ね」にくらべると非説明的であり、それだけに古朴な味を出しており、従つて又、「迎へを行かむ」との連接には重みはずつしりと乗り移つてゆく感じがある。これに反し、〔八五〕の「山尋ね」は、もはや分析的な思惟の形が歌をやむなく説明的にし、普遍性を一般に与えるよう努力されており、その結果、意味分析の範圍が「君が行きけ長くなりぬ」まで、上からゆるやかに垂れ下り、更に「山尋ね」という説明句で一旦柔く受けとめた上、次の「むかへか行かむ」「待ちにか待たむ」と、七音による二箇一對の、〔四三三〕〔四三三〕の同角度の屈折をくりかえして、終りに行くほど何か感情も調べもやゝ急調に衝迫してゆく感がある。これに反して、〔九〇〕の「迎へを行かむ待つには待たじ」には繰返しとはまた違つた、何か重重しい転換とでも云えそうなものを感じることができ。恐らく〔九〇〕が伝誦歌に近く、〔八五〕はこれが個人作にふさわしく、技巧的に生長したものとと思われる。

〔八六〕について。

こゝでは六首の中に異伝の歌を見つけ出せないが、かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして（巻四、七二二）は、この「八六」に做つた作であることは明らかであるのみならず、他にも

おくれゐて恋ひつつあらずは紀の国の妹背の山にあらま
しものを（巻四、五四四）

の如き類想歌があるので、恐らく飛鳥藤原、少くとも藤原前後の作品が磐姫の作として逆に伝誦歌の中から転入したと推定すべきではなからうか。「磐根しまきて」の解には、具体的に死所に葬られる時の死人の様相を實際に磐を枕にして横たわるとする説、及び旅中などで難渋しながら死ぬこととの譬にとる説とがあるが、「八五」以下連作とすれば、第二解がふさわしい（註三）。類型的表現をとつていて、やはり伝誦歌的な臭がする。

「八七」「八九」について。

この両者は「八五」「九〇」の関係と同様に、互に類歌に属するが、「或本歌曰」として掲げてある後者の方がむしろ原歌に近い感じである。その「居明かして」という、意味の具体的な表明、第三句「ぬば玉の」に見えるいかにも自然な枕詞の用法、結句の「霜は降るとも」の率直、簡明で洪滞のない表現は、これが「八七」に比べ、いかにも歪曲、磨滅のない、素直な、原型をあらわにしているように感ずる。「八

七」で初句を「在りつつも」としたのは、意味が曖昧になるのを避けることができない。それだけに「君をば待たむ」との間の続き柄に緊密の度が低く、逆に第三句の「うち靡く吾が黒髪」は原歌にふさわしい「大らかさ」を失つて、説明句に墮しているのは惜しい。ただ第三句以下が、テンポは遅いが比較的屈曲の少ないリズムをとつているのは又特別の好ましさがある。このように、二首を比較すると、「八七」は「八九」の直接的な原歌調に比し、比喩的に生長しているように思われる。

「八八」について。

これも「八六」と同様、磐姫のものに他に異伝歌がないが、それだけに、情趣に深みのある、内観的な手法をこらしているようにさへ見える。従つて、これを一聯の他の作品と同等に扱うにはかなりの無理も感じられる。又集中の例に従い、初句以下の「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」を「いづべ」にかかる序詞と解せざるを得ないにしても、その序歌的発想が、稲田の上になびく霞の、或る瞬間の様態に實際に瞩目して、これを鋭く切りとつたと見るよりは、思惟的に時間の推移を注目し、理解し直したと思われる程の、かなり強い客観的な態度があつて、これを単純な序歌と考へて、解するのは適確でないと思う。それほどこの作品はすぐれていて、作者を磐姫とすることは更に当らない。またここに掲げられた一

聯の他の作品に比較しても、一際歌風が進んでいるように思う。

四、結 び

以上のように、磐姫の万葉に見える一聯の作品は、「皇后」という特殊な身分と生活場面に影響され、特有な雰囲気や歌全体を包みこみ、立体化することに成功しているに過ぎず、古代の女性一般に共通している弱点や苦悩の片鱗を僅かに示しているだけである。しかしその源流は、彼女が記紀の恋愛譚の主人公として登場する所までさかのぼる必要がある。特に大陸と顕著な交渉を持った仁徳・允恭その他の諸帝が、次第に高まつて来る帝王の権威と人間本能の矛盾を露呈しながらも、ともかく、皇妃という特殊な地位の女性の一典型として登場させ、これと側近女性とを対決させた上、更にその対決を政治の偏重という解決方向に向わせているのが記紀のこの恋愛譚の構成である。磐姫の場合も例外ではない。そこに人間磐姫皇后としての免れ得ない悲嘆があり、宿命がある。

万葉集はその物語をそのまま受け止めつつ、しかもなお抒情詩特有の、人間磐姫個人の心情を洩らそうと努めているように思う。記紀の主人公磐姫皇后は、時にわざとらしい衣服をまとい、権力の中に身を装っているが、万葉では、かつて記紀の恋愛譚の霧の中で、伝誦的人物として登場し、立ち働いていた筈の人々が、かなり明らかな輪郭で体形をあらわにしているように思う。記紀に見える物語風の恋愛譚は、新し

い抒情詩の誕生のために、必然的に歌謡との密接な聯結を要請され、又、集団歌謡も、抒情詩形成のためには是非とも必要な、伝誦の世界からのみずからの脱皮を何とか仕遂げようとする。そこに伝誦作家磐姫の生誕があり、生長がある。

註一、仁徳の皇妃、磐姫五、仁徳皇妹一、允恭の皇子、輕太子

一、輕太子の同母妹である輕太郎女一、雄略二、上宮聖徳太子一、合計十一首。

註二、沢瀉久孝氏著「万葉の作品と時代」十五頁（伝誦歌の成立）註三、合右十頁（同右）

執筆 者 紹 介

森 本 治 吉 中央大学教授、文学博士

鴻 巢 隼 雄 昭和女子大学教授

田 辺 幸 雄 成蹊大学教授

大 久 保 正 東京外国語大学助教授

石 井 庄 司 東京教育大学教授

今 井 福 治 郎 和洋女子大学教授

賀 古 明 和洋女子大学教授